

あからさまな嘘で開始する「遊び」の対立

西阪 亮(関西学院大学大学院生)

1. はじめに

友人同士の会話ではしばしば、わざとおかしなことを言うことで対立を引き起こし、「おもしろい」やりとりを行うことがある。彼らはどのようにしてそのようなやりとりを構築するのだろうか。また、Bateson (1972) は、「遊び」で対立を行う様子から参与者たちの「親しい関係性」が見えるという。なぜそのように見えるのだろうか。

大津 (2004) は「遊びとしての対立行動」を、親しさを表すポジティブ・ポライトネス¹に分類している。また、大津 (同上) によると、友人同士が遊びとしての対立行動を開始するときには、「遊びとしての対立を始めたいと思った会話参加者が、自ら対立を表明する」パターンと、「わざと誤ったことや理不尽なことを言い、相手が対立表明をするように仕向ける」パターンがあるという。そして、それによって生じる対立の中で発話される悪口・反論・非難などは、笑いや声の韻律操作といった方法によって「遊びである」と伝え合っているという。

しかし大津の研究では、上述のような対立を引き起こす行為が「おもしろいもの」として成り立つために話し手や聞き手がどうふるまっているかということに焦点が置かれており、そもそもなぜ遊びとしての対立行動がその発話連鎖中のその時点において可能であったのかということには触れられていない。友人同士ならいつでも遊びとしての対立を行えるのではなく、対立が行われることが適切となる連鎖環境が存在し、かつそれを遊びとして話し手と聞き手の双方が理解できる合理的な理由があるはずだ。また、これまでの研究において遊びとしての対立行動は、親しさを表す手段であるとされてきたが、それ自体が「親しさ」を表すのではなく、重要なのはそのやりとりの「中身」ではないだろうか。つまり、会話の中で行われる行為の連鎖を通して、親しい関係性が会話参加者の間で示し合われているということである。会話参加者たちが「親しい」という根拠は、会話を詳細に分析・記述した上で、可視化されるものであると考えられる。

そこで本研究では、友人同士の間で交わされた「嘘から始まる遊びの対立連鎖」に着目し、なぜその対立連鎖が生じ、かつ「おもしろいもの」として話し手と聞き手の双方にとって理解可能になるのかを、会話分析の手法を用いて行為連鎖という観点から分析を行う。そしてその上で、会話参加者たちの「親しさ」というものが如何にして目に見える形で会話の中に表示されているのかを明らかにしたい。

2. データの説明

本稿で使用するデータは、CallFriend と呼ばれる電話会話コーパス (MacWhinney 2007) から、日本語母語話者の女性 2名の会話を採用した。

本稿で登場する 2名の女性は、ともにアメリカに留学中の学生である。会話の中から得られた情報によると、一人 (以下、名前を「ユキ」とする) はウエストバージニアに住んでおり、もう一人 (以下、名前を「アヤ」とする) はロサンゼルス付近に住んでいると推測される。また、ユキには「トムちゃん」と呼ばれる恋人が存在し、彼もまたウエストバージニアに住んでいるようである。

3. 分析

第1節で述べた通り、本稿では「嘘から始まる遊びの対立連鎖」に着目する。本稿における「嘘」とは、「事実とは異なることを述べることを指す。そしてそれは、聞き手が非難という形でその嘘を指摘することを適切にしている。かつ聞き手による非難によって、話し手の「嘘」は「嘘」として適切に対処されている。以下、友人同士の遊びの対立が明らかに嘘であるとわかるような発話から開始されている例を取り上げ、事例の分析を通して具体的に述べていく。

¹ Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論では、「他者に認められたい、好かれたい」といった欲求を「ポジティブ・フェイス」、逆に、「他者に踏み込まれたくない、ほっておいてほしい」といった欲求を「ネガティブ・フェイス」と定義し、相手のポジティブ・フェイスを満たそうとする行為を「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、そして、相手のネガティブ・フェイスに配慮する行為を「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んでいる。

3.1 嘘から始まる遊びの対立連鎖

右の断片を見てみよう。断片より以前から、ユキとアヤはアメリカの観光地について話しており、01 行目から 09 行目はその続きである。ユキはニューヨークに夏に行き、その滞在期間、恋人のトムちゃんはマサチューセッツで休暇を過ごしていたという(10 行目)。それを聞いたアヤは 11 行目で、トムちゃんの出身地がマサチューセッツなのかどうかを尋ねる質問をユキに向ける。その後、12 行目ユキは「ん::ん。」とまず違うということを伝え、次にトムちゃんがウエストバージニア出身であることを明かす。ここからユキの発話には笑いが含まれ、13 行目の「. hhh ¥実は地元民¥huhu」や 15 行目の「田舎もんくなんです>uhu. h. h」も同様に笑いを伴って発話がなされている。また、これらの発話に対してアヤもともに笑っている(14, 16 行目)。これらの発話からユキとアヤ、特にユキが行っている行為として考えられるのは、「トムちゃん」のことを「田舎者」とであると笑い者にしていることである。なぜなら、笑いながら「地元民」「田舎もん」というように、明らかに「田舎出身」であることを「おもしろいもの」として提示し、それを揶揄するようなデザインで発話されているように聞こえるからである。

しかし、18 行目ではユキは一変し、「↑んなこと言ったって僕²だって日本で山梨生まれだからさ:。」と始め、続いて 20 行目で「田舎者なんだけど、」と述べる。つまりユキは「自分も田舎者である」と述べているのである。しかし、ユキは単純に自分が「田舎者である」ことを伝えているのではないだろう。なぜなら、18 行目が「んなこと(そんなことを)言ったって」と始められていることから、直前までの発話に反論し、これまでトムちゃんを「地元民」で「田舎者」と揶揄していた立場を逆転させていると考えられるからである。したがって、これまでトムちゃんを笑い者にしていたが、自分はその立場ではないことを表明しているように見える発話となっている。21 行目でアヤが「言えないか:。」と述べるのは、まさにアヤがそのようにユキの発話を理解したということが窺え、それに対してユキが「う::↑ん。」(22 行目)と同意していることから、上述のことが支持できよう。

以降のやりとりから、本稿で注目したい「嘘」のやりとりが始まる。ここからは「嘘」がどのように開始され、それがなぜ「嘘」と言えるのかを解明していく。さらに、それがなぜ「対立」を引き起こすのか、その合理的な理由も明らかにする。

3.1.1 あからさまな嘘

さて、注目したいのは 23 行目から始まるやりとりである。23 行目でアヤは「>私は<言えるかな、」と述べる。この発話の組み立てを見ると、まず「私は」ということで他の人、つまりここではユキと対比させ、「言える」と述べている。したがってこの発話は、ユキはトムちゃんのことを「田舎者」と言えないが、自分はそれを言える立場であることを表明するもののように聞こえる。さらに語尾の「な」を強く発話しており、その発話の仕方には自信のようなものも感じられる。しかし一方で、「かな」という疑問の終助詞が使われていることから、不確実さのようなものも見える。このように断言せず、曖昧性を含んだ発話を行うことにより、アヤは相手に判断をゆだね、同意や不同意をユキに要求しているように見える。

【Callfriend-1722 22:20~23:10】

((ユキとアヤはアメリカの観光地について話している。))

01 アヤ:ん:::ニューヨークは(.)遠いか:.
02 ユキ:ニューヨーク,(.)行ってきたよ夏.
03 アヤ:h:::sh:::
04 ユキ:ここに来る前に.
05 アヤ:↑あ::,
06 ユキ:[そうそうナイアガラ(0.5)と(0.6)ニューヨーク.よかつた↑わ,
07 アヤ:[よかつたよかつたよかつた:.
08 アヤ:° #えええ# [ニューヨーク行ったことないんだよな::↑:,
09 ユキ: [よかつた.たのしかつた↑わ,
10 ユキ:トムちゃんその間マサチューセッツに行ってパケーションだって,
11 アヤ:マサチューセッツ,(.)sh出身?
12 ユキ:ん::ん.トムちゃんはね::ウエストバージニアしゅ(h)っし(h)ん(h)huhuhu
13 ユキ:.hhh ¥実は地元民¥huhu
14 アヤ:uhu Aha:[:aha
15 ユキ: [田舎もんくなん[です>uhu.h.h
16 アヤ: [ehuhu
17 アヤ:.hh Aaa::aha::hahahaha
18 ユキ:↑んなこと言ったって僕だって日本で山梨生まれだからさ:,=
19 アヤ: [ahahaha
20 ユキ:=田舎者[なんだけど,]
21 アヤ: [. h h h]言えないか:..
22 ユキ:う::↑ん.
23 ■アヤ:>私は<言えるかな,
24 (0.7)
25 ⇒ユキ:.hh ° ええ:° (.)<北柏>のく(h)せ(h)に(h):?hihihi .h
26 (0.8)
27 ■アヤ:ぜんぜんぜんぜ:ん.((少し低くはずんだ声で))
28 ⇒ユキ:n:な:に言ってるんだよお前:=
29 ■アヤ:⇒北柏くびくりにしたでしよ都会で,.h
30 ⇒ユキ:>ふざけん[なよ:<
31 ■アヤ: [↑こんなにいっぱいある:::, huhu ((上乗った声で))
32 ⇒ユキ:な(h)に(h)も(h)ない(h)や(h)ん.
33 アヤ:.hh そうか[なあ:un- ahu
34 ユキ: [駅前になんにもなかったよコンビニしか::ahaha
35 アヤ:.hh ↑そうかしら::? aha[ha ((とぼけたような高い声で))
36 ユキ: [あの時間帯に:なにも↑なかったじやないの::,
37 アヤ:.hhh <それはねえ>? ((少し低めの吐息の混じった声で))
38 ユキ:° うん.
39 アヤ:<目のさっか↑>. uhu
40 ユキ:uhuhu .huhu
41 アヤ:あまりにすごいから隠してたんだよ,
42 ユキ:huhu .huhu <もうちゃん>元氣<もうちゃん>

² 会話を通して、ユキは一人称を「僕」としている。音声的な特徴や前述のトムちゃんを「彼氏」と述べていることから、ユキは女性であると考えられる。

アヤによる23行目の発話に対し、ユキは25行目でまず、「.hh° ええ:??」と怪訝そうに疑問を表すような発話から始め、続けて「<北柏>のく(h)せ(h)に(h):?hihihi .h」と語尾を上げて述べる。その発話が行っている行為としては、「私は言えるかな」に対する同意や不同意ではなく、確認を行うものであると言えるだろう。また、この発話の前には0.7秒の沈黙があり、さらに「くせに」という「軽視」を表す表現が「北柏（千葉県のとある駅名）」を修飾している。つまり25行目には、23行目の発話に対して非選好的な特徴を持ち、かつ否定的な態度が見られる。そのようなユキの応答に対しアヤはすぐに答えず、0.8秒の沈黙（26行目）が生じ、その後アヤは27行目で「ぜんぜんぜんぜ:ん。」と少し低くはずんだ声で述べる。この発話は先ほどのユキの確認要求には答えてはいないが、「北柏」に対するユキの懐疑的な考えを打ち消すことに志向しているように見える。それに対してユキは28行目で「n:なに:言っただよお前:」と、アヤが言っていることに対して疑問を投げかけることによって、それを「聞き捨てならないもの」として扱い、非難を行っている。その非難にもかかわらず、アヤは29行目でさらに続けて「>北柏<びっくりしたでしょ都会で.h」と、ユキが実際に北柏に遊びか何かで訪れた際の心境を確認するような問いかけを行う。それに対しユキは30行目でその確認要求には答えず、「>ふざけんなよ<」というより明示的な非難の表現をアヤの発話に向けている。それでもアヤは30行目の語尾とオーバーラップするようにしてユキの発話を遮り、31行目で「↑こんなにいっぱいある:::, huhu」と上擦った声で発話する。この発話は、北柏を訪れたユキの「びっくりした」応答を表現していると考えられる。それを聞いたユキは32行目で「な(h)に(h)も(h)ない(h)や(h)ん。」と、31行目の「いっぱいある」とは真逆のことを述べて反論するのである。さらに34行目では「駅前になんにもなかったよコンビニしか: ahaha」と、北柏の駅前に行った自分の経験を述べることによって、32行目で自分が「なにもない」といった理由を述べているように見える発話をする。

このようなやりとりを見ると、アヤは自分の出身地を事実とは異なって表現している、つまり、「嘘」をついているように見える。そのことは、ユキの発話から支持できる。23行目からのやりとりをもう一度見てみよう。上述したように、23行目の「>私は<言えるかな」という発話は、完全に「言える」とは言い切らず、少し曖昧さを含んでいる。それに対しユキは25行目で怪訝そうにそしてやや北柏を軽視するような表現を用いて、アヤに疑いの姿勢を向けている。また、27行目に対する「なに言っただよお前」（28行目）という発話はアヤの発話が「おかしいもの」であることを指摘しているし、29行目と31行目でアヤによって表現される「北柏の都会性」に関しては、「ふざけんなよ」「なにもない」（30, 32行目）と明示的な非難の言葉とユキが経験を述べることによって、反論されている。さらに、「駅前になんにもなかったよコンビニしか」という34行目の発話は、自分が訪れたことがある「北柏」をアヤが明らかに異なるものとして表現していることの指摘となっていると言えよう。それは同時に、「北柏を訪れた経験」が、自分の非難の正当性ととも、相手の主張が嘘であることを証明する根拠として用いられているのである。以上のことから、ユキはアヤの出身地に関する証言を「嘘」として扱っていることがわかる。他方、ユキだけでなくアヤも「嘘」として扱っている。それは23行目に不確かさを込めて、ユキに判断を委ねるようにデザインしていたり、27行目以降の発話（27, 31行目など）を様々に声色を変えたりと、それぞれの発話を冗談として提示しているように見えるからである。つまり、アヤは自らの発話を「嘘」として提示し、ユキはそのアヤの「嘘」を「嘘」として対処しているのである。

3.1.2 対立の合理性

以上見てきたように、彼女らは23行目から始まったアヤによる「嘘」を起点として、「嘘とそれに対する非難」という対立のやりとりを行っていると言える。しかしお互いにこれは「嘘のやりとり」であるということを認識しており、かつ笑いあっているため、対立を遊びとして捉えていると言えるだろう。

他方、対立が起こるには理由が必要であるだろう。この対立を合理的な対立として成立させる理由はなんだろうか。まず1つの理由としては、アヤの出身地をめぐる「嘘」であるだろう。ユキはその明らかな嘘に対して何度も指摘し、非難を行っている。

しかし、彼女たちの対立にはもう1つ理由があると考えられる。そもそも彼女たちは断片の11行目から17行目までのやりとりで、トムちゃんを「田舎者」と称して笑い話をしていた。しかしユキも田舎の生まれであり、笑いにできる立場でないことを告白する。他方アヤはその立場をとらず、むしろ「私は言えるかな」（23行目）と述べる。実際にアヤがいわゆる「都会」の生まれであるならば、特に問題はない。しかし25行目で「北柏のくせに」と言われている。つまりこの発話によって、少なくとも「田舎出身を笑える立場」にアヤがいないということがわかるだろう。それにもかかわらず、あたかも都会出身であるようにふるまう「嘘」を述べることで「自分はそうではない」とするのは、田舎出身であることを認めるユキと、対立関係を作ることにアヤが志向したと考えられる。その後も続くアヤの「嘘」（27, 29, 31行目）とそれに対するユキの非難（28, 30, 32行目）はまさにその対立関係を表示しているように見える。

以上2点が、この対立のやりとりを合理的かつ適切にしていると考えられる。

3.2 親しい関係性

以上、彼女たちの対立がどのように行われ、なぜ対立をしているのか、そしてその対立の理由は何なのかということをも明らかにした。一方、書きおこしを見ると、彼女らは対立の真ただ中でお互いに笑いあっている。さらに、アヤに関して言えば、声色を様々に変え（27, 31, 35, 37 行目）で、「嘘」の発話を行っている。つまり彼女らは、大津（2004）が明らかにした、「遊びである」ことを伝えるメタメッセージを用いて、このやりとりを行っているのである。したがって、彼女らのやりとりはまさしく、「遊び」の対立であると言えるだろう。よって、Bateson（1972）や大津（2004）に従えば、アヤとユキは親しい関係の友人同士であると考えることが可能であるだろう。しかし、本当にそれだけの理由で「親しい」ということを判断してもよいのだろうか。たしかに、彼女たちのやりとりの様子を見れば、親しいということはわかるのだが、なぜ、どのように、親しいのだろうか。本節では最後にこの点について、もう一步踏み込んで分析を行いたい。

彼女たちが親しいということがわかる最も明示的な証拠は、彼女たちが「お互いに関する共通の知識を示し合っている」という点である。23 行目の「私は言えるかな」という発話に対し、ユキは「北柏のくせに」と述べる。ここからユキは「北柏」がどのような場所かを知っていると言える。さらにその知識は、「駅前にコンビニ以外なかった」（34 行目）という具体性もある。また、3.1 では触れなかったが、ユキは 36 行目で、「あの時間帯になにもなかったじゃないの」と述べている。この発話には、「あの」という話し手と聞き手の間に共通の記憶として存在している出来事を指示する（吉本 1992）際に用いられる指示詞が使われ、さらに「なかったじゃないの」とアヤに確認を求めている。つまり、アヤとユキはそのときその場に一緒にいたということが読み取れるだろう。他方、アヤに関しても、「北柏びっくりしたでしょ」（29 行目）と、確認要求の形で発話し、ユキが「北柏を訪れた」ということを参照して話しているように見える。これらのことから、アヤとユキは、お互いに「ユキが北柏を知っている」「ユキが北柏を訪れたことがある」ことを前提として、この「嘘」のやりとりを行っていることがわかる。したがって、お互いがお互いに関する知識を示し合っているということが観察可能であるだろう。そしてお互いに「嘘であること」を理解した上で、「嘘を言うーその嘘を非難する」という対立のやりとりを行い、笑い合うことで「おもしろい」やりとりであるということを表示し合っているのである。ここに、彼女たちの「親しい関係」が垣間見られるのではないだろうか。

4. おわりに

今回は、友人同士の親しい関係性がどのように示されるのかという疑問に端を発し、その問いを解明するため、友人同士の「遊びの対立」というやりとりに着目して分析を行った。本稿ではその「遊びの対立」の中でも、「嘘から始まる遊びの対立連鎖」に焦点を当て、会話分析の手法を用いて分析を行った。

本稿ではまず、そもそもなぜ対立が起こるのかという根本的な理由の解明を行った。そしてそれは、あからさまな「嘘」と、それによって達成される対立関係の構築が要因であるということが明らかになった。次に、会話の中で示し合われる「親しさ」について考察を行った。その「親しい関係性」は、会話参加者たちが会話を通して「共通の知識」を示し合い、それを前提とした「嘘」の発話を、お互いが「嘘」であることを認識しながら行われているということから垣間見ることができた。

しかし本稿では、一組の会話参加者たちのデータしか扱っていないため、これが一般化できるかどうかは、今後データをさらに増やして検討していく必要がある。また、「遊びの対立」として、本稿では「嘘から始まる遊びの対立連鎖」を取り上げたが、「遊びの対立」には、例えば聞き手に対する悪口などから始まるものもあり、本稿で得られた知見が他の対立連鎖にも当てはめることができるかについても他のデータと比較を行うことで考察すべきであるだろう。これらについては今後の課題として、研究を進めていきたい。

参考文献

- Bateson, G. (1972) *Steps to an ecology of mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- 川上恭子(1993)「談話における「まあ」の用法と機能(1): 応答型用法の分類」『園田国文』14 pp. 69-78
- Mac Whinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J. C. Beal, K.P. Corrigan & H. L. Moisl (Eds.). *Creating and digitizing language corpora: Synchronic databases*. Vol. 1, pp. 163-180. Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- 大津友美 (2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネスー遊びとしての対立行動に着目してー」『社会言語科学』第6巻 第2号 pp. 44-53
- 吉本啓(1992)「日本語の指示詞コソアの体系」金水敏・田窪行則編『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 pp. 105-122